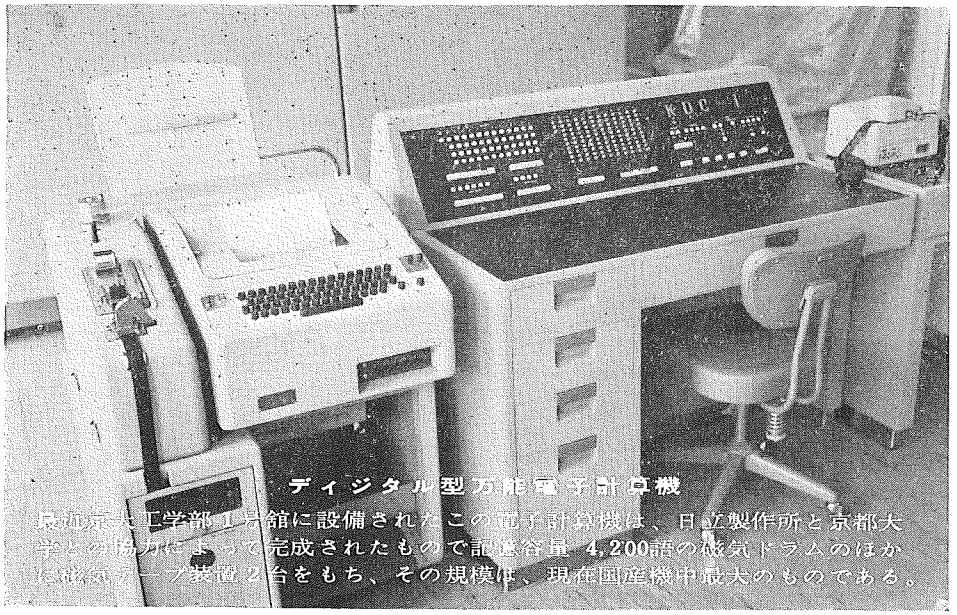
洛友會報

京都市左京区吉田本町
京都大学工学部
電気工学科教室内
洛友会



ディジタル型万能電子計算機

最近京大工学部1号館に設備されたこの電子計算機は、日立製作所と京都大学との協力によって完成されたもので記憶容量4,200語の磁気ドラムのほかに磁気テープ装置2台をもち、その規模は、現在国産機中最大のものである。

隨感

鳥養利三郎

男女掃除くらべ

配達される郵便物の中から「キリストの心」というパンフレットが見つかると、心あたたまる思いがする。川合信水老師から送って下さるからである。青年のころから神の教えの伝道と若い人たちの補導とに専心打ちこんで来られた老師は、既に九十四歳にもなられた今日このごろなお富士の裾野で、口と筆とで「キリストの心」を説きつづけておられるのである。

私が老師に初めて接したのは昭和六年のころであったと思う。綾部の郡是製糸という会社は社員の養成訓練ならびに厚生施設に特異の努力を払うというので、当時全国的に有名であった。先代の波多野社長が川合先生を非常に尊敬せられ、仙台の東北学院におられた師を綾部へ招へいして全社員の訓育を一任せられただけでなく、社長自身が心から師事せられたというから、郡是の経営方針も工員の育て方も川合イズムから発足していたのであろう。私は見学のため工場を訪れて先生にお目にかかる機会を得たのである。

その日私は早朝に出社して朝食（重役も工員も同じ食堂で同じものを一緒に食べていたが、私もおしょうばんさせてもらった）から終業までの日程を一通り見学させてもらった。教えられることが数々あったのはいうまでもないが、ここではその中の一つだけを記してみよう。それは先生が実際経験された掃除についてのお話である。

どういう訳か男工は掃除にかけては女工に遠く及ばない。世間ではこれは当然のことだときめてしまって問題にしようとはしない。しかし先生はどうしても得心が行かない。原因なり理由なりをつきこんで検討する必要があると考えられた。そこで女工と同じような掃除ができるまでは何カ月でも何年でも繰りかえしきたえてみようと決意された。それからは男工側は何回検査を受けてもダメだ、ダメだといって追い帰されてばかりいたそうである。ついに半年経った。「先生今度こそ大丈夫と思います」というので、行って見るといかにもよくできている。「原因を本当につきとめたか」と聞くと、「何回やってもしかられるばかりなので万策つき、ついにスパイを出して女工の掃除ぶりを探って見ました。ところが、女工には一定の掃除日はなく、暇さえあればはくでもなくふくでもなく、ただやさしくなでまわしている。男工は常日ごろはほうりっぱなしにして置いて、いざ掃除日だというと力まかせにこすったりたたいたりする。ちりほこりやあかはよく取れはするが、床がこすれたり柱に傷がついたり、ぎこちなくなる。そこでわれわれもこの一カ月は女工と同様に毎日終業後になでまわして見ました。」掃除だけのことで半年間も工員たちをしったしつづけた先生も先生なら、またしかられ通しにもひるみもせず、ついて掃除の奥義に徹するにいたった工員たちも工員たちである。双方の呼吸がピッタリしたればこそこの掃除哲学に到達したのである。

この哲理はすべての世事にもまた学問の道にも通ずる。本当の仕事というもの、特に学問のように理解に骨の折れるものは、力づくや一気の勢いなどでわからせ得るものではない。毎日毎時じっくりとなでまわしつづけることによってのみ徹することができるであろう。試験勉強ではダメである。毎日毎日の一ページずつの勉強が何よりも物をいうであろう。読書百遍意自ら通ずる。掃除の奥義を身をもってきわめられた郡是の人たちはまた人世の歩み方をとくと会得されたことであろう。

私がこのお話をたびたびうけ売りするものだから、川合先生もいつまでも覚えていて下さって、お書きになるパンフレットを今もたえず送って下さるのである。

漁父生涯竹一竿

標題は一休禅師の書かれた禅家の句からかりて来たのである。最低限の生活に甘んじながら、ひたすら修行一途にうちこむ禅林の三昧境をうたったものであろう。我田引水かとも思うが、これを凡俗の身にあてはめ

めるならば、自分の仕事には生涯をかけて一路精進しなければならぬ。功利本位で持ち場分野から逸脱するようではいけないという意味に取っても、はなはだしいこじつけともいわれまい。もう少し露骨な解釈をするならば、専門のことの勉強を怠っていながら、らち外のことに口を出すのはいけないという意味にもなろうか。

先月のはじめ島津製作所の社長室に、親友鈴木庸輔氏を訪れていろいろ話し合っていたとき、はからずもこの句を教えられた。何んでも矢代仁兵衛氏が所蔵されているとかで、鈴木さんも同氏から聞いたということであった。こんなよい文句は禅門以外の人にも広く知らせたいと思う。もっともマスコミ時代の気の早い連中はこんな文句などには、ばかばかしくて見むきもしないだろうとは思うが、それだけに、またよく聞いてもらう必要もあろうというものである。

つい最近私は志摩国立公園を回って、賢島や多得島を訪れた。多得島はほんの小さい島であるが御木本幸吉翁が本拠を構えたので有名になった。たしか翁が九十四歳のころであったと思うが、私はこの島に翁を訪れて歓談にときを過ごしたことがある。談は徹頭徹尾真珠に関することで終始したのであるが、その話の途中にも翁はたびたび手を打って家人を呼び「才何番目のかごを持ってこい」といわれる。持ってきた真珠貝のはいったかごの内容について、そのつど、実験の経過と見通しなどを説明せられ、そして「これに電気を応用する方法はありませんか」と聞かれる。その情熱のはげしさはとても九十余歳の老人とは思えなかったものである。当時翁は真珠の改良に電気を利用して見ようという考想を持っておられたらしく、声をはげまして「今後二十年間私の研究に協力するという約束をしてくれ」。ときに私はすでに六十五歳「そうするとあなたの百十四歳まで、私の八十五歳までですナー。よろしい」と答えて握手したのである。だが惜しくも翁は間もなく亡くなられた。翁ほどに名をなした者ならば、ほとんどすべてが都会に居を移して派手な生活を楽しもうとしたり、なかには政治道楽をはじめたりするものである。翁はこの島に立てこもったきりで「用のある者はそちらから来い、おれは俗人には用はない」とばかり、真珠貝を相手に、一生一竿、勉強しつづけたのである。一休の句を教えられたとたんに、私は八年前の翁との会談を思い出し、その一生一竿の生涯にただただ頭の下がる思いを深うしたのである。

島津源蔵翁にも同様のことがいえる。翁が亡くなられる直前まで、毎朝四時、五時から実験室にたてこもり、創意工夫に一心を傾けて老いを知らなかったことは有名な話である。翁にもまた専門以外のことにかす耳も口もなかったらしい。

マスコミ時代にはとかく物事が公式的になる。そしてりつぶそうとする。しかも反面またスターをたたえすぎる。一生一竿流の涙ぐましい凡人の精進などは一向うけないらしい。かといっても、もし万一にも時流に迎合して専門外のことに出しゃばったり、大衆文化活動に浮き身をやつしたり、政治闘争を学園に持ちこんだりする学者の方が、より多く羽ぶりがきくようならば、教授の給料を上げてみたところで、日本の学問の発展は望めないのではないか。

才五回洛友会
四国支部総会記事

昭和三十五年六月十八日、風光明眉瀬戸高松の地に前田、近藤両先生並に山村幹事の御来駕を得、紅羽旅館にて才五回洛友会四国支部総会および懇親会を開催した。

先づ総会は、支部長渡部兼雄氏の欧米訪問の印象を交えての挨拶に始まり、次いで中沢幹事より昭和三十四年度会務、会計報告を滞りなく終り、また先生を代表して前田先生より電気、電子両教室の近況の御話、山村幹事の洛友会会員の近況についての御話があり、次に任期満了に伴う支部役員の改選案が呈出され満場異議なく次の如く承認された。

支部長　渡部　兼雄（重任）
副支部長　北脇　保喜（重任）
同　宮地　冬樹（新任）
幹事　中沢　力（新任）
安堂　勝年（重任）
阿部　要（同）
藤本　悟郎（新任）
片岡　恒（重任）
小倉　裕三（同）

総会に引ついで懇親会に移ったが、当日の参集者は会員二十一人、先生方を含めて二十四人と前年を上廻る盛況であり、会は漸くクライマックスに達し和気藹々のうちにかくし芸が次から次えと披露され、深江の夕焼と共に暮れた初夏の夕べは、いつはてるともなく更けゆき、洛北に遊びし吉田山時代の思い出から将来の抱負えと語りあった。

（中沢　力記）

洛友会
北陸支部総会記事

七月十三日大久保先生が北陸電力有峰ダム工事を視察に来られた機会に支部会員十三名が集って、本部より山村幹事を迎え富山市奥田屋にて総会を開催した。

総会は長井支部長の挨拶に始まり、増田幹事から会計報告、会員の移動等について述べられ、増田幹事提案の役員の重任を一同異議なく承認した。

引つづき懇親会に移り、山村幹事より洛友会の状況について、また大久保先生より教室の様子、最近の就職状況について、また長井さん、鵜飼さんから昔の教室の思い出等の話が出て和気藹々の中に九時頃会を閉ぢた。

出席者
大久保先生

山村幹事
長井要蔵（大5）　荒井武治（大12）
鵜飼二郎（昭2）　増田盛雄（昭8）
篠原一恭（昭9）　毛呂正保（昭15）
森本芳夫（昭16）　岩本市平（昭22）
野村精二（昭24）　籠　宗和（昭28）
松崎司郎（昭28）　堀　英二（昭29）
小塚雄一郎（昭30）

洛友会
九州支部総会記事

九月に入って梅雨を思わせるような雨が降りつづき、やっと秋になったという感じのしみじみする福岡の今日このごろです。

学術会議才五部会に御出席のため福岡にお出になった林重憲先生を博多の電気ビルにほど近い旅館にお迎えして一六年度洛友会九州支部総会を開催しました。

幸い当日は土曜日であり、会員の方々には午後二時頃よりお集まり願い、囲碁に麻雀に日頃の腕を競っていただきました。地元福岡の会員は遠来の方々に一敗地に塗れたようでした。

遠来の会員としては、鹿児島、北九州地区よりの御出席もあり、また社用のため御来福中であった日新電機の大森さん、住友電工の小林さんにも御出席いただき、六時すぎ総会を開催しました。

高柳支部長の挨拶のあと、林先生の教室の現状について御報告に、旧い会員は教室のめざましい発展を喜こび、新しい会員は教室での先生の講義など思い出しながら耳をかたむけました。このあと、幹事より会計報告と、八幡製鉄福山勉氏の転出に伴なう支部評議員の後任として安川電機の岐美忠雄氏を推薦したいとの提案を満場一致で承認して総会を終り、懇親会に移りました。

懇親会での自己紹介はやや定例の行事となってしまいましたが、毎年出席される方々からも新しい珍談奇談が飛び出してなかなか捨て難いものがあるようです。三十名近い会員の自己紹介が終るのに二時間近い時間がかかり、幹事が予定した酒量も軽くこえて、何時もここらあたりでお願いする写真も寄せ書きも酒のせいでしょうか幹事が失念するといった仕儀となってしまいました。このため何時ものように紙上をかざることが出来なかったのは残念ですが、酒宴が例年になく盛大であったことを御想像いただけると思います。

なお、一昨年より講習所卒業生の一部の方々には当支部総会に御出席いただいておりましたが、調査の結果、九州地区には四十名程度の方々が在住して居られる事がわかり、今後は多数の方々に御出席いただき、教室関係者の親睦を一層深めたいと考え、大正十年御卒業の林田さんに幹事になっていただくことにしました。これにより次年度からの総会が一層盛大になることを念じつつ擱筆します。

（加来誠一郎記）

出席者

林　重憲
高柳与四郎（大3）脇山　俊一（大14）
宮田　秀介（大15）岡本　督（昭4）
河本　勝寿（昭5）戸山　信芳（昭8）
加来誠一郎（昭11）森　恒忠（昭11）
安田振之助（昭12）小菅佐七郎（昭14）
甲斐　靖造（昭16）杉村　英男（昭21）
古城戸正隆（昭21）増岡　健一（昭21）
大塚　成吉（昭22）深町　藤吉（昭22）
平川　四郎（昭26）上田　保之（昭27）

参加者

大森　武司（昭11）小林　四郎（昭13）
電気講習所
林田　学蔵（大10）万田　元房（大11）
林　朝吉（大12）村田　周造（大13）
塩田　善六（昭2）

特別参加者（阪大卒業）

熊井　潔（昭15）

以上二十七名

鶴友会遠足記事

毎月十二日に午餐会を開いていますが、六月十二日は日曜日になりましたので、家族同伴のレクリエーションを催すことになり、鎌倉の瑞泉寺を訪ねました。参加者十八名、同伴者九名。

梅雨期とてお天気を心配していましたが、お精進のよいおぢいさんおばあさん連中の遠足とあって稀に見る小春日和の暖かさ、こんな恵まれた日も少ないでしょう。正午、目的地に到着、境内の風光を観賞し、一時からお寺御自慢の精進料理に一同御満悦、禅問答等あって三時過ぎ寺を辞し、思い思いに大塔宮跡、八幡宮、近代美術館、大仏等を見物して夕刻東京に帰りました。

鳥養先生は京都に御用があって御参加願えなかったことは残念でした。

錦屏山瑞泉寺

鎌倉末期に夢窓国師の開いた臨済宗の寺で鎌倉市二階堂紅葉谷を突き当った山の中腹にある。夢窓国師といえばすぐに京都の天竜寺や西芳寺を思い出す。大変な美男子で宮廷に上ると官女の付け文が袂に一杯になったと伝えられる人。

国師が築いた林泉がここにも残っているが、天竜寺や苔寺（西芳寺）の様な人の眼を奪う美しさはない。ここでは夢窓国師は庭よりもまわりの山や谷の美しさを愛し、これをとり入れた様な感じ「山谷を見るは仏性を見るなり」とする禅の自然観がこんな庭を作らせたかも知れない。

「精進料理を出すのものどかに自然に親しみおいしい食事を食べていただくのが禅の精神につながるからで……」と住職大下豊道さんはいう。

昼食は七番菜といって七回料理が運ばれる。境内には梅の木と水仙が多い。真山えの上り口の辺、岩盤をきってつけた小道は一面に苔むして宋元の絵画を思わせる。この庭の見どころであろう。

（乙葉真一記）

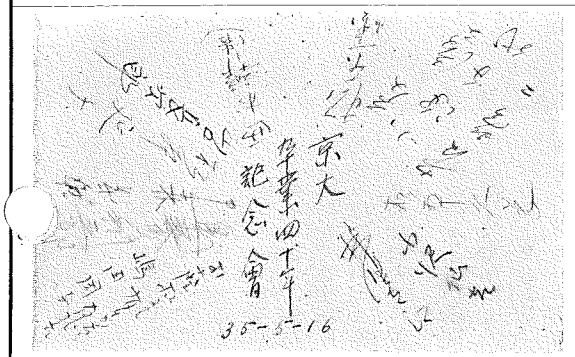
京大卒業 四十年記念会の記

われわれが京都大学を卒業したのは一九二〇年で、第一次世界大戦の直後経済界も思想的にも動揺の激しい頃であったが、早いもので今年で丁度四十年を迎えることとなった。第二次戦争から我国の敗戦と言う厳しい世相のなかで、とにかく生命を永らえ分相応に社会に貢献して来たことは同慶至極であると言うことから記念の会合を催すこととなった。

洛友会の名簿によると十五名の卒業生のうち井沢孝哉君が居所不明と言うことになっているが、諸般の事情から東京都近郊に住んで居られるのではないかと思う。物故者は白井、島田の両君で誠に哀悼に堪えぬ次第であるが残りの十二名が、健在であることはその割合から見て近頃珍らしい話と思う。

五月十六日（月）当日は差支えのため四名欠席せられたが京都からは林君が加わり島田未亡人や恩師鳥養先生を迎え得たことは錦上花を添えたもので厚く謝意を表する次第である。

三時、半蔵門の東条会館に集まって夫人連を鳥養先生に紹介して居るうちに、ある会員から鳥養先生でしたかと言う意外と言うか迂かつと言う如何にも記念会らしい発言があって、たちまち一同の爆笑を買った場面もあった。記念撮影の後先約の会合に出席のため中座された先生を送り雑談に入ると、懐旧談に花の咲くのは予期通りだが、立ち上って秘話を身振りよろしく披露するものや、令嬢の縁談の頼みに一かどの理論めいたものをやっつけるものがあって、議事輻そう幹事大あわての態で、こんな事ならも少し時間を取って置くべきであったと悔まれたのである。



漸くの事に閉会を宣し五時から歌舞伎の観劇に赴くことが出来た。やって見るとやはり学校友達は良いもので、四十五周年も是非やろうと言う意見が強いようであった。但し夫人連の意見は聞き漏したから、次の幹事はこの辺に御注意を願い度いものである。

当日の出席者は鳥養先生島田夫人の外、小沢、菅、西村、松本一、松本久各夫妻と中森、林、山口の諸兄と堀岡夫人とであった。なおこの記念会の前後に芝間、山口両兄が郷里に居を移された事を附記し諸兄の御健康を祈って報告を終ります（菅琴二記）

青芝会（昭和十九年卒）卒業十五周年記念クラス会

暑さ漸くつのる候。関電打出クラブにおいて卒業後十五年目の定例会合を開いた。

御出席予定の林先生をお待ちしながら空腹をかかえて我慢しておりましたが、近藤先生のみ御参席になったので、林先生宅へ電話したところ「何か忘れていたな」という御調子で到々拝顔できなかったのは残念であった。

集合した面々は東京からかけつけた京極、木村両君をはじめ近畿地区近在の者が多く、もう少し集るだろうと予想していたがどうも忙しく走り廻る年令層のせいか突然の欠席連絡が多かった。

夕食時には各員から公務および私情の近況紹介を行なったところ、学生時代のサボリ癖から脱却して刻苦精励の勤務振りを発揮しており技術革新時代のバスに乗り遅れないよう努力しているのには心強い限りであった。

最後に、青芝会メンバー（昭和十九年卒）の近況家族写真帖の製作配布を提案し、欠席の皆様に御通知するよう出席者一同申し合わせましたので誌上をかりて報告しておきます。（松本肇記）

卒業成績証明書下附申請について

従来卒業成績証明書を必要とせられる場合、教室宛に簡単に口頭または手紙等で御依頼になっておりましたが、工学部において別紙所定様式の下附願により申請する場合に限り下附せられることになりましたのでお知らせいたします。

証明書下附願

昭和　年　月入学
昭和　年　月卒業
工学部　学科
工学研究科　修士課程専攻
博士課程
旧制大学院　学科
本籍
氏　名印
年　月　日生

左記の通り証明書を必要としますから下附くださいますようお願い致します。

記

一、証明書の種類
一、使用目的

昭和　年　月　日
京都大学工学部長　殿

訃音

佐伯政之助君（明四三）
大倉商事株式会社顧問

山下　行雄君（明四五）七月二〇日
電気式化学計器研究所社長

安達　二郎君（大六）
久　寿弥君（昭二二）

国友　末蔵君（明三九）十月十七日
中央電気工業株式会社監査役

以上五君は有為の材を懐きながら御逝去になりました。謹んで哀悼の意を表します。

なお、国友末蔵君は本年四月の東京光輪閣における総会には遙る遙るお元気なお姿で御出席なさいましたが、いま幽明境を異にして再び君のお姿に接することのできなくなりましたことは誠に悲しみの極み切々として痛惜の情堪え難きものを覚えるのであります。

君は卒業後、発電に電気化学にその薀蓄を傾け幾多の業績を挙げられ昭和二十八年三月には関川水系電源開発の功労者として高田市才一号名誉市民となられ、また、昭和三十一年には藍綬褒章を授与されました。

追って十月二十八日には市民葬が営まれました。

お願い

昭和三十五年度洛友会費未納の方には振替用紙がはさんでありますからお忘れなく是非お払い込み下さいなお、名簿編集に必要でありますから動務先または現住所および電話番号などの変更のあった場合は遅滞なく別葉がきにて御通知下さい。